

柏崎市立剣野小学校

1 研修の推進にあたって

当校では、「気付き、考え、実行する子ども」の育成を目指して日々の教育活動を展開している。今年度の校内研究では、目指す子ども像を受けて、研修テーマを「気付き、考え、実行する子どもの育成」と定めた。また、取組をより具現化するために「確かな学力を付けるため言語活動のあり方」をサブテーマとし、具体的な子どもの姿を「しっかり話を聞き、話の内容を自分のものとしてとらえ、整理し、発信していく（話していく）子ども」と設定して、全教科を通じて、言語活動の充実を中核に実践を進めている。

2 昨年度までの取組から

昨年度は、「聞く力・話す力」を付けるために、下学年では「聞くこと」に、上学年では「聞くこと」に加え「話すこと」に重点を置き、「聞くこと」から徐々に「話すこと」へと内容を移行させる指導を行った。その結果、次のような子どもたちの姿が見えてきた。

《下学年》

- ・ 良い姿勢を意識して話を聞くようになってきた。
- ・ 友だちの話を聞いて、うなずいたり、拍手をしたりする姿が見られるようになってきた。

《上学年》

- ・ 話の内容を分かりやすく伝えるために、声の大きさを意識したり、観点をもった話し方をしたり、話の構成を考えて話したりすることができるようになってきた。
- ・ 話の形（話型）を指導し、的確に話す練習をすることで、友だちと自分の意見を比べたり、あるテーマに沿って討論したりすることができるようになってきた。

昨年度の校内研修の反省として、「聞く力・話す力」の育成を重点化して取り組んだ結果、言語活動を支える力の一つである「書く力」の育成に目を向けることができなかったことがあった。

「聞く・話す」ことを子どもたちの態度を中心に指導を進めた結果と反省し、話すための内容を構成する「書く」ことの大切さの必要性を考え、今年度は、学習指導改善調査の結果を全職員で共有し、分析結果を基に校内研修を進めることにした。また、研修結果を日々の授業改善に役立て、さらに、「聞く力・書く力・話す力」が子どもたちに付くよう実践に取り組んでいくことにした。

3 学習指導改善調査を受けた実践

(1) 今年度の学習指導改善調査より見えてきた課題と改善点

～国語科の指導から～

	4年生	5年生	6年生
誤答の多かった問題	<ul style="list-style-type: none"> 作文の中で使わなかったメモの記号を選び、その理由を問う問題。 スピーチ原稿と取材メモを比べ、詳しく書くことができる段落を選び、取材メモの中から付け足す内容を見付けて、文を書く問題。 	<ul style="list-style-type: none"> 文章を読み、4つの資料から情報を読み取って書き抜く問題。 問題文の最後のほうにある空欄に、適切な言葉を入れる問題。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料を読み、一定の条件（5段落）を満たしながら、構成したメモを基に、作文を書く問題。 作文の条件として選択した資料の内容に、自分の知識や経験を記述するよう求められた問題。
授業改善の方策	<ul style="list-style-type: none"> 理由を話したり、書いたりする場面を設定し、「理由は（なぜなら・わけは）、～～だからです。」という文の形で答え、それが正しいかどうか考えさせるようにする。 目的をもち、テーマに沿って述べていく（書いていく）力を伸ばすようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書や問題文等で、文章に触れる機会を読み取る機会を意図的に増やし、文章の前後関係や文章の構成により目を向けるようにする。 自分の考えや意見に根拠・理由をふまえて話をさせるようにする。その際、根拠はどこから取ったものなのか、その妥当性についても挙げられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 構成を意識した作文を書く。まず、構成メモを作り、それを基に作文を書くことができるようにする。 一定の時間でまとまった分量の作文が書けるようにする。

(2) 実践例

○4年生 「だれもがかかわり合えるように」

テーマに沿ってメモを分類・整理することを目指して

○5年生 「大造じいさんとガン」

段落構成を意識した心情の変化を記述することを目指して

○6年生 「修学旅行の思い出を残そう」

まとまりのある文章を書く力をもった子どもの育成を目指して

4 実践から

改善の方策を受けて、全校としては、次の4点を共通の課題として、今年度は、国語の時間を中心にしながら、他の教科においても取り組んでいる。

- ・ 構成メモの役割の理解
- ・ メモを基にした作文を書くこと
- ・ 自分の経験や考えを生かした作文
- ・ ある程度の文字数の文章を書くこと

校内研修では、各学年に応じた「聞く力・話す力」を高めるための方策について、重点的に研修している。しかし、授業研究の中で見られた子どもたちの姿には、自分の考えを話すための「書く」活動が必要になり、書くことによって、自分の考えを整理している姿も見られた。今年度、子どもたちに付けたい「聞く力・書く力・話す力」のかかわりとその指導のあり方がより重要な内容となり、その解決が求められた。そこで、今年度実施した学習指導改善調査の分析結果を受けた実践は、解決に向けた一つの足がかりとなり、さらに実践を進めている。

テーマに沿ってメモを分類・整理することを目指して

～第4学年 国語科「だれもがかかわり合えるように」の実践を通して～

柏崎市立剣野小学校 佐藤麻友・山崎眞由美

1 授業改善の視点

学習指導改善調査では、テーマを意識しながら、「取材メモ」と「スピーチ原稿」を関連付けて読み取ることが十分とは言えなかった。子どもたちは、社会科や総合的な学習の時間などで取材メモを書くことを多く経験している。しかし、そのメモは、話の中心よりも、聞き取った内容をたくさん書くことに終始している傾向が見られた。

そこで、テーマに沿った取材メモを書き、その内容を分類・整理して、発表に生かす学習を行うことにより、「取材メモ」と「スピーチ原稿」を関連付けて考える力が育つと考え、実践に取り組んだ。

2 実践の概要

(1) 単元名 調べて発表しよう「だれもがかかわり合えるように」(全15時間)

〈資料〉「手と心で読む」大島健甫

(2) 本時の目標 (8/15時間)

○話したいことが明確になるように、観点を決めて取材し、取材メモを分類・整理することを通して、自分にとって大切な情報かどうか判断することができる。

(3) 本時の構想

①分類・整理モデルの提示

これまでに子どもたちは、取材してメモを取る活動を通して、取材する力を身に付けてきている。しかし、まとめの段階では、取材メモの中から「なんとなく」まとめをしている子どもが多い。

本単元では「だれもがかかわり合えるように」というテーマで調べ学習を行い、それをもとに原稿を書き、スピーチを行うことにした。スピーチ原稿を書くときに取材メモを分類・整理する方法を学び、それを身に付けることにより、取材メモと原稿の関係を理解し、筋道立てた原稿を書くことができると考えた。

しかし、子どもたちは、取材メモの分類・整理は未経験であるため、実際の活動がイメージしにくいと考えられる。

そこで、本時は、分類・整理のモデルを提示する。教科書の例を基に拡大した取材メモを作り、それを実際に動かしながら分類・整理を行い、その後、自分の取材メモを同じように分類・整理することを一斉指導し、その流れを理解することができると考えた。

②自分の取材メモを分類・整理する場面の設定

分類・整理の方法を理解した後、子どもたちがそれぞれの取材メモを分類・整理する場面を設ける。子どもたちはA6サイズのカード形式の取材メモを使っているので、実際に取材メモを動かすことによって分類しやすくなると考えた。

さらに、整理の段階では、分類した取材メモの項目をワークシートに書き、分類して気付いたことに☆印をつけたり、大切だと思ったことに波線を引いたりすることにした。



取材メモ例

(4) 本時の実際

①分類・整理モデルの提示

「取材メモを分類・整理する方法を学ぼう」という授業の目標を示した。子どもたちに拡大した取材メモ例を提示し、それを3人の子どもたちの代表に分類させた。見ている子どもたちからは「シャンプーとリモコンは仲間っぽいよね」というような意見が出てきた。代表はそれを参考に、「家の中」と「公共の建物」と「道路」という「場所」の観点で分類していった。



授業での板書

次に、代表が分類した取材メモ例を、整理用の表の周りに貼り、見付けた場所や物の名前だけを短い言葉で書き込んだ。そして、表を見て気付いたことを子どもたちに発言させた。子どもの意見をまとめて☆印を付けて表に書き込み、気付いたことの書き方を指導した。そして、気付きの中で特に重要なことには波線を引き、強調することも指導した。また、分類の過程で、自分のテーマに関係ない内容の取材メモは使わなくてもよいことを強調した。

②観点を決め、自分のメモを分類・整理する場面の設定

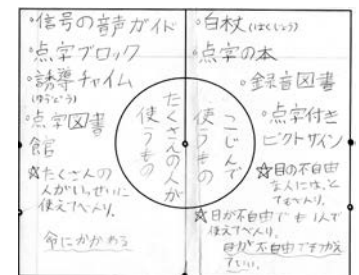
分類・整理のモデルを示した後、「自分の取材メモを分類・整理しよう」と投げかけた。すぐに子どもたちは自分の取材メモを、どのように分けられるかを考えながら、2～4つ程の山に分け始めた。

A 児は「目の不自由な人のための道具」というテーマで調査し、取材メモを「こじんで使うもの」と「たくさんの人が使うもの」という観点で分類した。A 児は、たくさんの人が使うものは「命にかかわる」ものがあることに気付き、波線を引くことができた。また、A 児と同様のテーマでも、『家の中』『お店』『遊び』で使うもの」という観点で分類・整理した子どももいた。子ども一人一人が異なる観点で分類・整理していることから、子どもたちは分類・整理の方法を理解して活動していたと考える。



個人での分類の様子

目の不自由な人にとって便利な工夫について調査していた B 児は、手話についての取材メモを「手話は耳の不自由な人にとって便利なものだから、目の不自由な人は見えないから便利ではない」ということに気付き、そのカードを分類から外すことができた。



A 児の分類・整理

(5) 本時の成果と課題

①成果

○分類・整理の流れの理解

分類・整理の具体的な手順を一斉指導し、モデルを視覚的に示したことにより、子どもたちは分類・整理の流れを理解し、すぐに活動に取り組むことができた。90%の子どもが自分の力で取材メモを分類・整理することができた。

○取材メモの取捨選択

多くの子どもが、自分のテーマに関係のない取材メモを、分類の過程で外すことができた。

自分のテーマを理解した上で分類したため、取捨選択することができたと考えられる。

②課題

○分類の観点

子どもたちは、すぐに取材メモを分類することはできたものの、その分類の観点を整理用の表の丸の中に書き入れることが難しかった。観点の例を具体的に示し、自分の分類がどの観点によるものか考えさせる必要があった。

段落構成を意識した心情の変化を書くことを目指して

～第5学年 国語科「大造じいさんとガン」の実践を通して～

柏崎市立剣野小学校 金澤 元・竹内 暁美

1 授業改善の視点

子どもたちは、国語の授業の中で自分の考えを述べたり、相手の考えを聞き、自分の考えとの相違点について考えたりしている。これまで物語単元では、内容をよく読んで登場人物の心情や周りの情景の変化についてお互いの考えを意見交換という形で行い、題材への理解を深めてきた。しかし、「話す」「聞く」活動を中心に行っていると、自分の思いや考えがよくまとまらなかったり、相手に思いが伝わらなかったりすることがある。そこで、文章の叙述に即しながら「書く」という活動を通して自分の考えを確かなものにする授業構成を行ってきたい。

2 実践の概要

(1) 単元名

「大造じいさんとガン」(全8時間)

(2) 本時の目標 (3/8時間)

○「2」「3」の場面での、大造じいさんの残雪に対する見方の変化を読み取ることができる。

(3) 本時の構想

①描写と行動を対応させながら心情の変化を読み取る

「2」「3」場面の中から情景描写、行動描写に注目して大造じいさんの心情を読み取る。情景や動作、その時の大造じいさんの様子を抜き出し、対応させながら読み進めることにより大造じいさんの残雪に対する見方の変化を視覚的に捉えさせる。

②考えの根拠を明らかにするための「書く」場面の設定

大造じいさんの残雪に対する見方が変わったことについて考えるため、描写と行動を読み取り根拠を明らかにしながら書く。さらに、結論から先に述べ、文章表現を引用した段落構成を意識して自分の考えを書かせる。

(4) 本時の実際

①情景描写と行動を対応させながら心情の変化を読み取る

「「2」「3」の場面を読んで、周りの様子で大造じいさんの気持ちが分かる表現を読み取りましょう。」と投げ掛け、情景描写や行動描写に着目しながら、それぞれの場面での大造じいさんの気持ちを並行して書かせた。

「2」の場面から

- | | |
|-------------|------------------------------------|
| ・様子や言葉 | 「今年こそは、目にものみせてくれるぞ。」 |
| ・大造じいさんの気持ち | ほおをびりびりさせているけど、残雪をやっつける気持ちが満々と感じる。 |
| ・様子や言葉 | 「ううん。」と、うなっていました。 |
| ・大造じいさんの気持ち | 残雪は本当に手強い。 |

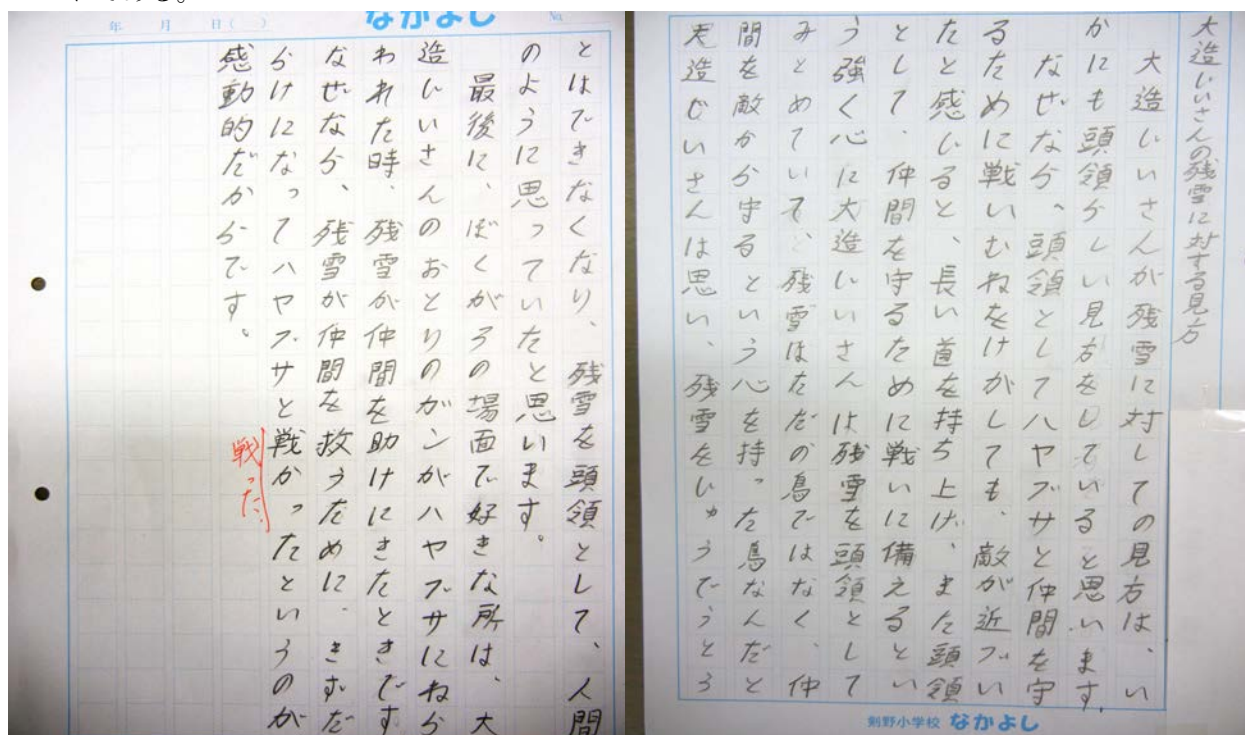
「3」の場面から

- | | |
|-------------|--------------------------|
| ・様子や言葉 | 「うまくいくぞ。」「さあ、いよいよ戦闘開始だ。」 |
| ・大造じいさんの気持ち | わくわくするな。今度こそやっつけられるかな。 |

- ・様子や言葉 「大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわぎませんでした。」
- ・大造じいさんの気持ち 恐るべし残雪、ただの鳥ではないな。

②大造じいさんの残雪に対する心情の変化を書く

情景描写や行動描写に着目しながら心情の変化を書いた後、「大造じいさんの残雪に対する見方はどのように変わったか、理由をはっきりさせて書こう。」と投げ掛けた。考えを書くときの条件として「①「はじめ・なか・おわり」のまとまりを作り、3または4段落構成にすること。②第1段落に大造じいさんの残雪に対する見方の結論を書くこと。③教科書にある文章や言葉を使うこと」を提示した。前半で文章叙述に即した大造じいさんの気持ちを捉える活動を行ったので、心情を表す表現に着目することができた。以下は3つの条件にあった児童の作文シートである。



(5) 本時の成果と課題

①成果

- 物語の登場人物の行動や心情の変化を文章叙述に即しながら読み取り、それぞれの行動描写と気持ちに対応させながら読み深めることにより、場面や時間及び心情の変化を意識的に捉えることができた。
- 7月に実施した学習指導改善調査では、「書く」という領域で段落を意識した文章構成や立場や理由を明確にして書くことが、文字数、立場、理由、体験予想の項目全てにおいて県平均を下回っていたが、国語の授業を中心に他の教科でも、段落構成を意識し、さらに結論や立場を明確にした記述をする指導を継続したことにより、後期に行った過去問題による追調査では、今年度とは異なる問題ではあるが、同じ項目で県平均を上回ることができた。

②課題

- 「書く」ことに対する苦手意識は払拭されつつあるものの、理由や根拠を明確にするための資料や表現を追及したり記述したりすることが苦手である。今回は物語文が題材だったこともあり、表現が容易であったが、説明文のような題材においても筆者の考えや段落構成に着目させ、結論や立場を明確にした文章表現ができるように指導を行う必要がある。

まとまりのある文章を書く力をもった子どもの育成を目指して

～第6学年 国語科「修学旅行の思い出を残そう」の実践を通して～

柏崎市立剣野小学校 高橋菜鶴美・大原真弓

1 授業改善の視点

学力改善調査では、条件にあったまとまりのある作文を書くことが十分でなかった。日頃の子どもたちが書く作文を見ると思いつくままにだらだら同じ内容を何回も書くか、内容が前後する文を書きがちな実態がある。また、段落を意識してまとまった分量の作文を書くことが十分にできない子どもたちである。そこで、学習指導改善調査のように「なか」が三つとなる計五段落のまとまりを考えて文を書く子どもの育成を目指して取り組んだ。

2 実践の概要

(1) 単元名

「修学旅行の思い出を残そう」(全5時間)

(2) 単元の目標

○五つ程度の段落分けを意識しながら 800 字程度のまとまりのある文章を書くことができる。

(3) 単元の構想

①興味のある体験を作文の題材にした単元構成

興味のある題材にすることを体験から想起する。まず、夏休みの体験を想起させ、思い出を三つ考えて「なか」とし、「はじめ」「おわり」をつけてまとまりのある作文に書くように指導する。その後、9月末に体験する修学旅行について作文を書くようにした。6年生にとって修学旅行は思い出深く、心に残る体験がたくさんできる学習である。これを生かして作文を書くように単元を構成した。

②構想メモを作る

筋道立てて自分の考えを書くために構想メモを作る。付箋に出来事をいくつか書き出し、その中から一番書きたいことを絞る。次にその思い出にまつわる思いや詳しいメモを付け足していく。「なか」のメモを作ってから「おわり」で全体に対しての思いをはっきりさせる。最後に「はじめ」のメモを作る。この作業を行ってから作文を書くように支援する。

③原稿用紙の使い方や接続詞を意識させる表示の工夫

改行したときは一文字下げることや会話文の前後は改行するなどの原稿用紙の使い方を例示したり、接続詞の例をたくさん出したりして自分の作文の内容にあわせて選べるようにする。掲示しておくことで言葉に迷ったときに見ることでヒントを得て、また考えることができるようにした。

(4) 実践の実際

①作文の条件をあらかじめ知らせておく

夏休みの思い出を「思い出ベストスリー」として三つ選び、「なか」を三つに構成することを伝えて作文を書いた。構成メモを作る作業では同じ体験をした子ども同士で思いを共有したり友だちと自分の思い出を話したりしてメモを作った。その後メモをもとにして原稿用紙に作文を書いた。メモを作るのは時間がかかるが作ってしまえば、後は簡単に書けることを実感していた。メモを作るよさに気付き、段落を意識してまとまりをもった作文の書き方が分かってきた。

そこで、修学旅行では体験した中で一つのことについて選び、その中から三つを「なか」として書くように条件を出した。条件を絞ったことで夏休みの作文の時よりもより詳しく書かなければならないことに多くの子どもたちが気付いた。

②付箋を移動させながら全体の構成を考える

子どもたちは自分の楽しかったことを想起し、思いついた文や言葉などを思いつくままにたくさん書き出していった。その付箋をノートに貼りながら書く順序を決めていく。下の段には選んだ言葉について自分が思うことや考えたことを一つの付箋に一つずつの思いをセットにして書くようにした。短い文ならば書けるので付箋に入る程度の言葉に広げて一文にして考えを広げていく。そのとき、隣同士でアドバイスし合うことでより自分の思いを詳しくメモに書く様子が見られた。



③段落と接続詞、原稿用紙の使い方を意識させる

内容のまとまりごとに段落を作ることと、接続詞を使った書き方を示した。条件で示した「なか」を三つにして「はじめ」「おわり」をつけて計五段落にすることを条件にして「なか」を書くときにも順接や逆接を表す接続詞や段落の中で会話文の改行などをあらかじめ示しておき、必要に応じて使うように支援した。

何も支援しない場合の作文では段落を作ること自体が難しいが、最初から三つの文節を意識しているためか、「ここでは一文字下げらるんだよね。」とか「段落を変えたところ以外の下はあけないよ。」「かぎかつこの前と後ろは何も書かないよ。」「次の文は下げるんだよ。」などと、お互いにアドバイスする姿が見られた。

(5) 成果と課題

①成果

- 全体を見通して構想する力が付いた

今まで、作文は思いつくままに書くことがほとんどであったため、内容が前後する作文がしばしば見られたが、順序よく段落分けされた作文を書くことができるようになった。

また、総合的な学習の時間での振り返りでは、「三つに分けて書くんだよね。」というつぶやきが聞こえてきたり、算数のやり方説明で「はじめに」「つぎに」「そして」などの接続詞を使った説明が見られたりするようになってきた。

- 原稿用紙の使い方が改善された

段落を意識することで文章ごとに行を変えたり、まとまりを考えずにだらだらと文章を書き連ねたりする状態が改善された。段落を意識させるために原稿用紙の使い方を確認した為か、会話文についても決まりを意識して書こうとする子どもたちが増えた。

②課題

- 時間を意識しにくかった

メモを作ることは構成を考える上では効果的だったが、書くことが苦手な子どもにとっては、メモ作りそのものに時間がかかりすぎて一定の時間内にまとまった文章を書くことが難しかった。時間配分を考えるような支援が必要である。

- 内容面で深まりが弱かった

内容面での深まりや広がりが見られるように一つの体験を三つに分けるという制限を試みたが、自分の思いをより効果的に表現するという点では弱さがあった。よりよい内容にするために推敲をする意識をもたせる必要がある。